

法政大学学術機関リポジトリ

HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

# 科学史と心理学史をふまえた心理学の科学性および主観性と客観性の次元的理解

著者	小田 友理恵
出版者	法政大学大学院
雑誌名	大学院紀要 = Bulletin of graduate studies
巻	81
ページ	123-139
発行年	2018-10-31
URL	<a href="http://doi.org/10.15002/00021346">http://doi.org/10.15002/00021346</a>

# 科学史と心理学史をふまえた 心理学の科学性および主観性と客観性の次元的理解

人間社会研究科 人間福祉専攻

博士後期課程 2年 小田 友理恵

## はじめに

本稿の目的は、第一に「心理学はこころの科学である」と言うときの「科学」とはどのようなことなのか、第二に心理学において「主観・主観的・主観性」と「客観・客観的・客観性」(以下、これらをまとめて主客と呼んで論ずる)が、心理学の科学性とどのように関連するのか、この二点について検討することである。その理由は、臨床心理学において心理学の「科学性」について考えることが不可欠であるという点にある。

臨床心理士は、科学者かつ実践家であると定義づけられ (Marzillier & Hall, 1999 下山訳 2003), その専門性は心理学の「科学性」と深く関わり合う。アメリカの臨床心理士の教育訓練のモデルは、ボウルダー会議以降、科学と実践の比重や相互作用に関しては議論が続いている (Frank, 1984; Belar & Perry, 1992; Baker & Benjamin, 2000; 松見, 2005) が、一貫して広義の「科学者-実践家モデル」に則っている。日本においてはわが国独自のモデルのあり方も探られているが、基本的には「科学者-実践家モデル」を意識した教育がなされていると言える (日本心理臨床学会, 1993; 下山, 2014)。わが国では 2017 年 9 月に公認心理師法が施行された。公認心理師は、「保健医療、福祉、教育その他の分野において、心理学に関する専門的知識及び技術をもって (公認心理師法第二条) 国民の心理的支援を行う。よって、心理学が今後の社会においてますます影響力を増すことは明らかである。そのような背景のもと、心理学がどのような学問であるかを、科学性という概念を通して再検討する意義は大きいと考えられる。

これまでの日本において、心理学の科学性については、サトウ・渡邊・尾見 (2000)、渡辺・村田・高橋 (2002) の他、臨床の側からは河合・福島・村瀬 (1991)、河合 (1995)、下山 (2001)、丹野 (2001)、大塚 (2004) などによって論じられてきた。中でも渡辺・村田・高橋 (2002) は、科学史や心理学史にも言及し、広く歴史的な視点を導入することで、現代の心理学を相対的に論じている。

本稿では、渡辺・村田・高橋 (2002) では触れられていない科学そのものの定義や分類について歴史的に言及したうえで、科学の方法である「説明」と「理解」に焦点を当てる。その後、渡辺 (2002) による心理学の分類を足掛かりとして、主客の多義性および科学性との関連について論じ、主客の次元的理解という方法を提案する。

## 科学の定義

科学の定義を確認するために、サイエンス (science) の意味の歴史的な変遷を確認する。野家 (2015, pp.19-27) によると、サイエンスは、もとはラテン語のスキエンティア (scientia) に由来し、14 世紀半ばまで一般的な「知識」や「学問」の意味で用いられてきた<sup>1</sup>。そして 16-17 世紀の「科学革命」によって近代科学が誕生し、18 世紀初頭にサイエンスは「観察や実験など経験的方法にもとづいて実証された法則的知識」という限定された特殊な知識を意味するようになった。一方日本では江戸末期から明治初期にかけて、社会制度や研究・教育のシステムを含めて、ヨーロッパのすでに確立された科学がまるごとパッケージとして移入された。その頃に英語のサイエンスの訳語として「科学」「学」「理学」「窮理」などの語が当てられていた。「科学」という言葉は

もともとドイツ語の **Fachwissenschaft**(専門分野に分かれた学問)に相当する「個別諸科学」の意味をもっていたが、明治末期になるとサイエンスの訳語は「科学」へと収斂していった。

以上の野家(2015)の記述から、日本にヨーロッパの科学が移入された当時のヨーロッパでのサイエンスの意味は「観察や実験など経験的方法にもとづいて実証された法則的知識」であり、日本語の「科学」はもともと「個別諸科学」の意味であったが、明治末期にかけて徐々に変化し、ヨーロッパのサイエンスの訳語として定着していったことがわかる。

さて、時代を少し下り、1927年に編纂された岩波哲学辞典増訂5版を確認すると、

邦語で「科学」と言えば「学」よりも特殊な意義を表す、前者は英語の **Science** 後者は独語の **Wissenschaft** に当るとも見られる。しかし両者の限界は明瞭でなく縷々混用せられる。「科学」はかく広義にも解せられるがまた狭義にも解せられ、「自然科学」と同義に用いられることもある。(筆者が現代仮名遣いに改変)

とあり、次のような記述が続く。広義は「学」の項目に、狭義は「自然科学」の項目に譲られ、その中間義として「科学とは、若干の仮定の上に立ち、一定の認識目的の下に合目的選択を施しつつ、内外一切の経験を、経験的もしくは先験的方法に従い、合理的に研究して得たる体系的知識である」と書かれている。

ここで英語とドイツ語の比較が行われているので、ついでながら英語、フランス語、ドイツ語で「科学」を意味する、サイエンス、シアンス、ヴィッセンシャフトの指す範囲、および日本語の「科学」との違いについて、中山(1974)を用いて説明する(図1)。概念として最もはっきりしているのが、フランス語のシアンスであり、数学を先頭に、公理主義と計量化によって形式と内容をととのえた精密科学のことを指す。英語のサイエンスは、19世紀に自然科学の意味に限定されるようになったが、産業社会を背景にした実験・観察を行う実学的学問であり、サイエンスにおいて数学はテクニカルな補助手段としての意味しか認められず、除外されている。ドイツ語のヴィッセンシャフトは最も広い範囲の意味を指し、大学内部で研究される学問・知識のすべてを含み、逆に大学外で行われるものは非科学的、趣味的、通俗的なものとして除外される。これに対して、日本語の「科学」は専門化した学問、すなわち個別学、専門学という意味合いが強く、近代科学独自の方法やパラダイムよりも、専門分化した現象的な形態に着目した言葉である<sup>2)</sup>。

現代の「科学」の意味はと言うと、広辞苑第6版によると

観察や実験など経験的手続きによって実証された法則的・体系的知識。また、個別の専門分野に別れた学問の総称。物理学・化学・生物学などの自然科学が科学の典型であるとされるが、経済学・法学などの社会科学、心理学・言語学などの人間科学もある。②狭義では自然科学と同義。

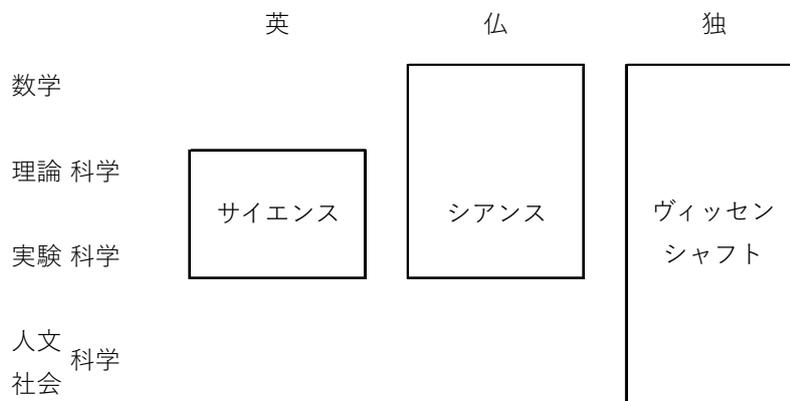


図1 サイエンス・シアンス・ヴィッセンシャフトの違い。

注) 中山(1974)より引用

とある。広辞苑では、心理学は人間科学に分類されていることも、注目すべきことである。岩波哲学・思想事典によると、「科学」の項目には「主として近代西欧に起源をもつ自然に関する学知を指す。広義には学問と同義である」とある。日本語の科学の意味は、先に確認した 1927 年当時の意味とおおむね変化していないことがわかる。さらに、英語の science の意味も確認すると、研究社英和辞典では science は「科学、＜特に＞自然科学；科学研究(法)；学問、…学」であり、和製英語の「サイエンス」は広辞苑第 6 版によると「学問。科学。特に、自然科学。」である。現代の日本においてサイエンス(science)というときは、どちらかという自然科学の意味に比重が置かれているようであるが、おおむね科学とサイエンスは同義であると言えよう。

以上のように、サイエンスおよび科学の意味には歴史的変遷や国による違いがあり、それについて論じる際には、自然科学に限定せずに幅広い意味で論じる必要がある。よって本稿では「科学」は主に広義の意味で使用し、自然科学について言及する際には「科学」ではなく「自然科学」と呼称することとする。

### 科学の分類(自然科学ともうひとつの科学)

次に科学の分類の歴史的な変遷を確認する。科学の分類の歴史について、田邊(1918)がまとめているので、少々長くなるが以下が論点である。

自然科学の発達に伴い、最初に科学を分類したのはフランシス・ベーコンであり、その分類方法は考案された 17 世紀から 19 世紀初めに至るまで使用されていた(図 2)。ベーコンは科学研究が必要とする精神能力によって、記憶と想像と悟性という 3 つの主な形式に分類した。また、この能力に応じて史学(History)、詩学(Poetry)、理学(Philosophy)の 3 つの大分類を設け、その下に個々の諸科学を包括しようとした。このうち、理学は「全ての理論的科学一切を包含」し、自然神学と宇宙論と人類論の 3 つからなる。自然科学は宇宙論の下に位置づけられており、心理学はその中ではなく、個人的人類論に分類されている。しかしベーコンは、精神能力による分類を徹底することはできず、その実際の区別は研究対象の相違であった。

19 世紀初め、ベンサムとアンペールが植物学に影響を受けて、科学の対象の客観的特徴による分類を始めた。ベンサムは Somatology(肉体)と Pneumatology(精神)、アンペールは Cosmologie(世界)と Noologie(精神)を対立させた。こうして「自然科学対精神科学」という対立が打ち立てられ、後世に大きな影響を与えた。その当時、精神科学に属する史学、言語学、法学、経済学などは、自然科学の著しい発展に比べて組織化が遅れていたが、自然科学に対立する一大分野として認めたことは大きな功績であった。

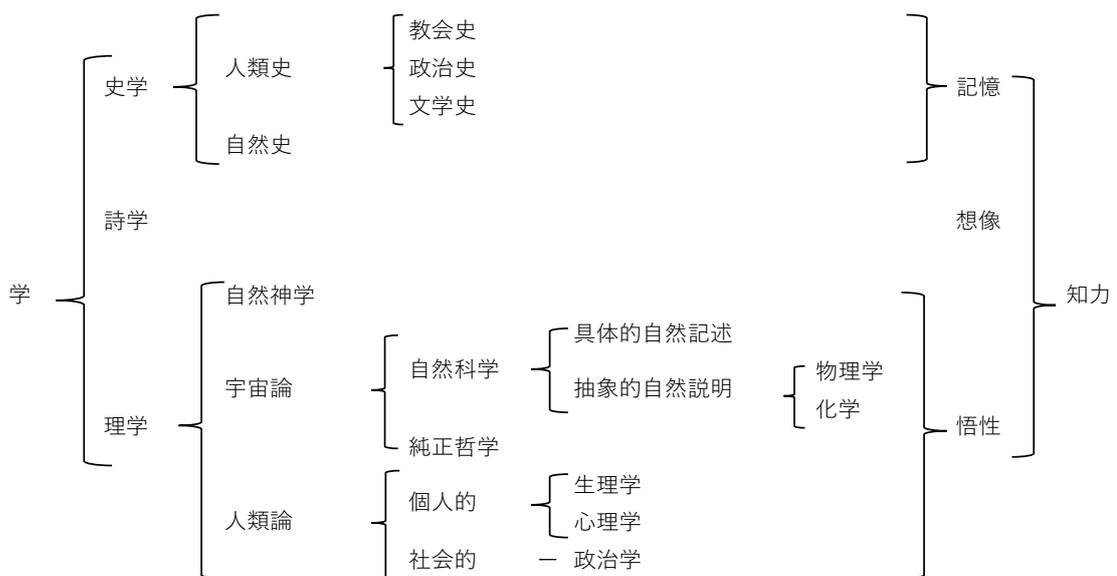


図2 ベーコンによる科学の分類。

注) 田邊(1918)p.173より引用

これらの考えを組織し、包括的な分類を試みたのが、ヴントである(表 1)。ヴントは *Logik II; Einleitung in die Philosophie*(Wundt, 1901)において、次の通りの分類を行っている。まず、それまで自然科学に編入されていた数学を、その対象が抽象的な形式であるとして、形式科学として実質的経験科学と区別した。次に、実質的経験科学を、客観的な経験内容のみを対象とする自然科学と、直接的で主観的な経験を対象とする精神科学とに大別した。自然科学と精神科学はそれぞれ、現象論的と組織論的と発生論的の 3 種から成る。現象論的の科学は自然と精神の規則の解釈を試み、組織論的の科学は、対象の性質の親近を組織的に配列する。発生論的の科学は、その両者の中間とも考えられ、現象の発展的な側面を中心に研究する。心理学は、発生論的な精神科学に分類された。

表1  
ヴントによる科学の分類

科学	形式的	純粋数学		
	実質的	自然科学	現象論的	物理学、化学、生理学
			発生論的	宇宙発達史、地質学、生物発生学
			組織論的	記述の星学、地理学、鉱物学、系統的動物学、系統的植物学
	精神科学	現象論的	心理学、社会学	
		発生論的	歴史	
組織論的		系統的法学、系統的経済学等		

注) 田邊(1918)p.181より引用

ヴントの分類方法に対して、科学の対象の違いではなく、研究方法によって分類すべきであると異論を唱えたのが、ヴィンデルバントとリッカートであった。ヴィンデルバントは 1894 年の「歴史と自然科学」という講演において、経験科学を、普遍の法則を求める自然科学と、歴史的事実の個性記述を目的とする史的科学与に分けた。そしてそれぞれを法則定立的、個性記述的と名付け、その対立を表した<sup>3</sup>。また、リッカートは *Die Grenzen der naturwissenschaftlichen Begriffsbildung*(Rickert, 1986)においてこの考えをさらに発展させて、歴史認識に固有の原理としての文化価値を重視し、文化価値に関係する科学を文化科学として、自然科学に対置した。

以上が田邊(1918)の論点である。このように科学は 19 世紀中に、自然科学と、それと対を成すもうひとつの科学の 2 つに大別されるようになっていった<sup>4</sup>。自然科学ではないもうひとつの科学には、20 世紀初頭には名称が定まっておらず、精神科学、社会科学、道徳科学、歴史科学、文化科学など様々な名称で呼ばれていた(向井, 1997)。ディルタイはこうした状況について、「知識の地球儀」の半分は「自然科学」となづけられているものの、他の半分を適切に表現しうる名称がみあたらないと嘆いていたが、現在でも事態はさほど変わらない(丸山, 1985)。岩波哲学・思想事典によると、近年は人間科学という名称が新たに市民権を獲得しつつある。本稿ではこれ以降、これら 2 つの科学うち、自然科学を指すときは科学と称さずに「自然科学」とし、もうひとつの科学の呼び名は岩波哲学・思想事典に倣い、引用文以外では原則「人間科学」で統一する。

## 人間科学の方法論

過去に自然科学と人間科学的方法的統合の試みがあったが、挫折に終わった。それについて、野家(2001)は、以下のように記述している。「科学の統一」の端緒は、18 世紀のヒュームによる「精神上の主題への実験哲学の応用」であった。ヒュームはニュートンの実験哲学の方法に触発され、それを人間科学の方法に取り入れようとしたのである。しかし、ヒュームは後に人間科学における実験的方法の適用に挫折し、人間科学における方法論を実験から観察へと後退させた。その後、20 世紀に入って自然科学と社会科学を統合し「統一科学」の理想を実現しようとしたのが、ウィーン学団の論理実証主義である。ところが、自ら提唱した完全な検証可能性の基準によって全称命題が検証不可能に陥った。ウィーン学団の主要メンバーは、ナチス台頭後にアメリカに亡命し、カルナップを中心に「ウィーン＝シカゴ学派」となり、ラディカルな「還元主義」を通して、すな

わち物理主義に基づいた「統一科学」を目指した。ところが、「還元主義」はさまざまな批判が加えられ、クワイン、ハンソン、クーンなどによる新しい科学哲学の潮流が現れた。以上が野家(2001)の論点であり、人間科学は自然科学に統一させられないまま、現在に至る。

丸山(1985)は、上記のような統一科学を目指した代表者としてミルを、その批判者としてディルタイを挙げ、人間科学における方法論争を以下のように記述している。ミルは「自然科学の方法」にもとづく社会学を目指して社会工学を打ち出したが、それを批判したディルタイは「生の自己省察」の理念にもとづいて「精神科学」を打ち出した。一連の方法論争は「説明と理解との論争」として理解される。「説明と理解」という対概念は歴史家のドロイゼンによってはじめて導入された。自然科学では、帰納によって法則を探求し、また法則からこの現象を演繹的に導出され、その本質は「説明」することである。これに対して歴史学の課題は「感性的なものにおいて精神的なものを、また特殊的なものにおいて一般的なものを見出すこと」、すなわち「理解」である。ドロイゼンは自然科学の「説明」と人間科学の「理解」という方法論的二元論を成立させ、ディルタイもこれを踏襲し、「われわれは自然を説明し、心的生を理解する」というテーゼを打ち出した。理解を伴う解釈科学は、自然的現実と異なり、そこで生活する人々の意味によって構成されている人間的社会的現実を前提とする。以上が丸山(1985)の論点である。

このように、自然科学的認識である「説明」と人間科学的認識である「理解」とは全く異なるものとされていた(向井, 1997)。とりわけ、「理解」の「説明」にはない性格として、「感情移入」すなわち「研究対象の精神的雰囲気、思考や感情や動機などを、研究者の心の中で再想像すること」が、ジンメルによって強調された(Wright, 1971 丸山・木岡訳 1984)。加えて Wright(1971/1984)は、志向性(intentionality)の次元や意味論的次元(すなわち行為者の目標や目的、記号ないしシンボルの意味、社会制度や宗教的儀式的意義など)が、当時の精神科学の方法論争の中で際立った役割を演じていたことを指摘している。

それぞれ異なった性格を持つ「説明」と「理解」を結びつけ、人間科学がそれら二相によって成立するとしたのがヴェーバーである(長山, 2015)。二相の結びつきとそれぞれの特徴について、長山(2015)は次のように述べている。

無限に多様な現実から、人間はそれぞれの価値関係(意味連関)にもとづいて一定の現実を切り取り、そこに潜む人間の動機を直観や感情移入によって『理解』する。そうして把握された社会的現実や人間の諸行為を社会科学は因果論的に探求し、説明するという図式である。前者は心理的明証性にかかわる経験相だが、それは未分節・無構造で直感的な経験であるために科学的な「妥当性(=客観性という表現が使われた時期もある)」を持ち得ないとされ、一方、後者の経験相は分節化された体験内容を有し、それ故、科学的な「妥当性」を持ち得るとされる。

つまり、ヴェーバー以前には、ディルタイが打ち出したテーゼの通りに、自然科学の方法としての「説明」と社会科学の方法としての「理解」が対立的に、単純化して捉えられていたが、ヴェーバーは社会科学を「理解」と「説明」の二相構造として、より精緻に捉えようとしていた。ただしこの場合、科学的な妥当性は「理解」の方法では得られず、「説明」によって初めて得られるということになるが、筆者はこの考えとは異なる考えを持っている<sup>6</sup>。この点については後に触れる。

さて、丸山(1985)によると、現在、人間科学内部において分析的方法と解釈学的方法の対立が、心理学を始めとした人間科学の個別領域においても生じている。それは、自然科学に方向付けられている「社会科学」と、人文学に由来し歴史的なものを扱う「人文科学」という学問分類にも表されている(丸山, 1985)。丸山(1985)によると、「説明」と「理解」との間には、「精緻な弁証法」を通した統一が求められている。長山(2015)は、ヴェーバーが論じた社会科学(人間科学)の経験相の二相構造を、臨床心理学にあてはめて検討を加えているが、これは丸山(1985)が主張する「精緻な弁証法」の試みの一つであると筆者は考えている。

まとめると、人間科学においては「説明と理解」にまつわる方法論争が起こった。それに対してヴェーバーは、理解とともに説明もまた必要であると強調した。Wright(1971/1984)は、行動科学が「説明と理解」を巡

っての人間科学の方法論争の戦場と化した、と指摘した。現代の心理学においては、この問題が表立って議論されているわけではないが、完全に決着がついた、とは言い難い。認知科学や脳科学の発展が目覚ましい今日、自然科学的な「説明」が重んじられる傾向にあるが、臨床心理学をはじめとした諸領域においては、人々へのアプローチとして依然「理解」の方法は不可欠である。

## 自然科学の方法論

一方、自然科学について目を向けると、こちらにも人間科学においてみられたような、方法論の変化が起きているのである。すなわち、自然科学の方法は「説明」のみである、ということは従来自明のこととされてきたが、近年になって自然科学における「理解」の重要性も強調されつつある。

野家(1993)によると、「科学哲学」はもともと 1920 年代後半に当時の自然科学の認識論的基盤への問い直しの必要に迫られ成立したが、1960 年代から「新科学哲学」の潮流が起きた。それは、「<科学の論理学>から<科学の解釈学>へ」という形で特徴づけられる。「科学の論理学」とは、「統一科学」を追求する科学理論の<インターナル・アプローチ>であり、「社会科学の自然科学化」を目指す。それに対して、「科学の解釈学」は、科学理論のより歴史的・社会的存在形態に着目する<エクスターナル・アプローチ>をとるものであり、「自然科学の社会科学化」を目指すものである。

佐々木(1996)によると、「科学の時代」と呼ばれた 19 世紀を経て 20 世紀になると、数学における「ゲーデルの不完全性定理」や、自然科学における「ディエムとクワイン説」の「決定不全性」概念の登場によって、科学の限界が明らかになった。精密自然科学のように比類ない確実性が保証され、確固たる基盤を前提としてきた精密自然科学のような知的営みにも、思想的・社会的な深層構造が存在する、という主張が、「パラダイム」という概念を用いてクーンによってなされた。このことは、自然に対する機械論的・数学的アプローチ以外の、「ありのまま」の自然を記述的・歴史的に見る自然史的アプローチの可能性を開くのである。

中村(1990)は、生命科学は普遍原理を求めるこれまでの研究の延長上に、時間への関心、物語性、思想性、多様性、日常性を取り戻す必要があると主張し、このような研究を「生命誌」と表現している。中村(1990)によると、物理学においても同様の傾向がある。

なお、野家(1993)は研究者側の歴史的・社会的な側面に、佐々木(1996)と中村(1990)は研究対象である自然の歴史的な側面に着目しているという差異には、注意が必要である。

このように現代において「説明と理解」は、人間科学だけでなく、自然科学においても考慮されなければならない問題となった。よって、自然科学と人間科学の両方の側面を持つと考えられる心理学においては、「説明と理解」の議論が重要であることはより一層明白である。

## 心理学における態度・視点・認識論上の対立軸と「主観的」/「客観的」の多義性

以上、科学の定義と分類を確認し、その方法について論じた。次に、これらのことを心理学に関連させて考察していく。その足掛かりとして、以下では渡辺(2002)を紹介し、それに対して 2 点の問題点を挙げ、主客の多義性について論じる。

渡辺(2002)は、上述の「理解」/「説明」の態度の軸に、「主観的」/「客観的」の視点というもう一つの軸を加え、2 組の軸を組み合わせた 4 象限の中に心理学の諸潮流を位置づけている(図 3)。「説明」では一方的な観察対象に対する態度を取り、「理解」では研究対象に対してコミュニケーション可能な相手としての態度を取る。

「主観的」/「客観的」視点は、研究対象を自分の心とするのか、他者の心とするのかの違いがあり、一人称的/三人称的視点と言い換えることができる。一人称的とは、観察者と観察対象が同じであることを指し、三人称的とは、観察者と観察対象が異なることを指す。渡辺(2002)によると、一般に「説明」という方法を採用際の態度は客観的である、と理解されることが多いが、この場合はそうと限らず、たとえば内観心理学は、この場合一人称的視点(「主観的」)ではあるが「説明」の方法を用いる。さらに渡辺(2002)は、この「主観的」/「客

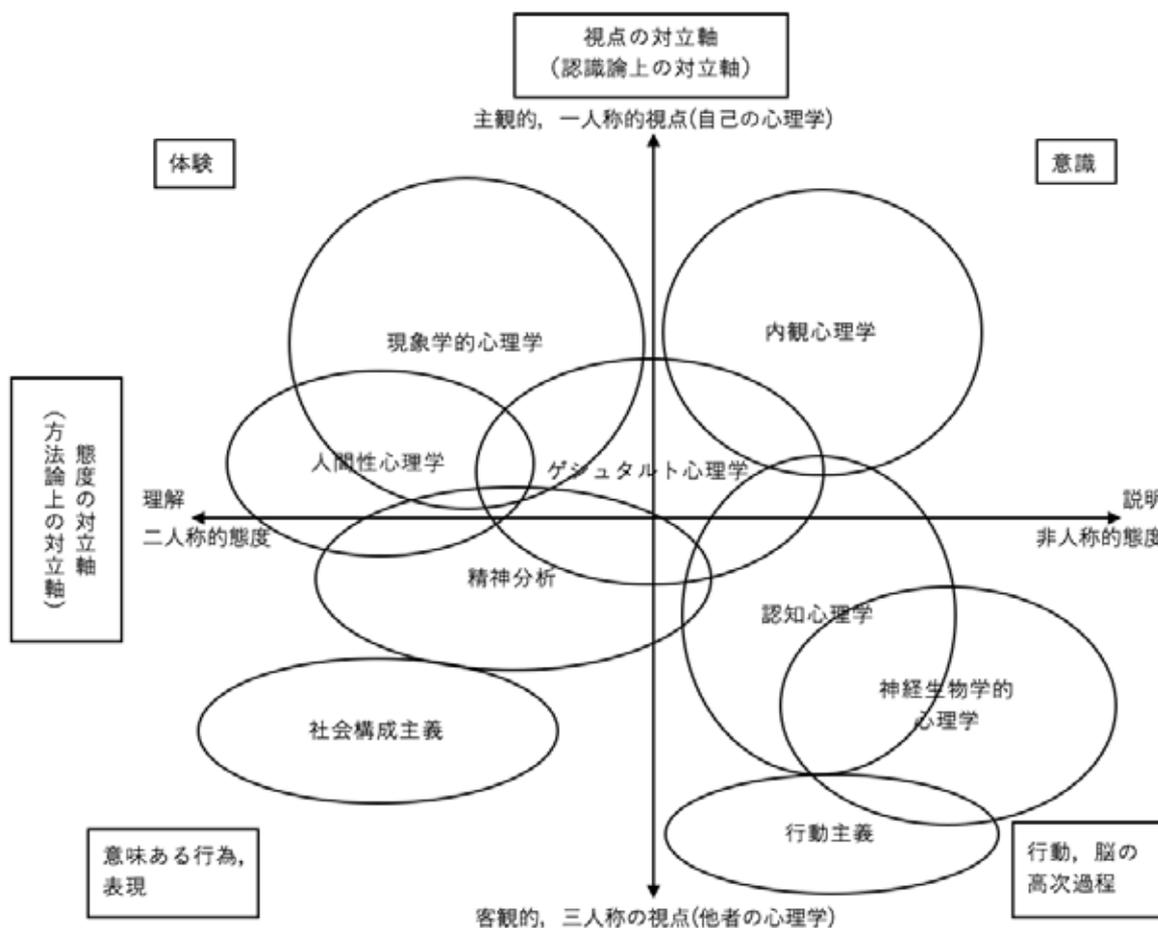


図3 4つの象限に配置された心理学の歴史的諸潮流。

注) 渡辺(2002)より引用

観的」という視点の対立軸が、高橋(2016)の心理学史における認識論上の対立軸、すなわち「心」/「物」(「意識」/「行動」という二元論の対立軸とほぼ対応が可能であることを指摘している。

高橋(2016)の認識論上の対立軸について確認する前に、心理学史に関する一般的な言説について簡単に触れておく。心理学は歴史上、長い間哲学とその領域を共有していた。1879年ヴントがドイツ・ライプツィヒ大学に心理学実験室を設立したことをメルクマールとして、心理学は哲学から独立し、実験的手法や数学的記述を取り入れて近代心理学として成立した、という歴史が一般的に共有されている(サトウ・高砂, 2003; サトウ, 2014)。ヴントは、「説明」による心理学を打ち立てたのである<sup>7</sup>。高橋(2016)は、これを長く流布している非常に有力な考え方であると認める一方で、こうした考え方を採用することによって見過ごされてしまう恐れのある、近代心理学の成立以前から現代心理学までの認識論的変遷をより緻密に描写している。

以下は高橋(2016)の主張の骨子である(図4参照)。西洋の心理学史上、3つの認識論的革命が起こった。第1の革命は、19世紀後半のヴントによる古典的実験心理学の成立である。西洋においては中世まで、「自然と人間」が一元的に理解される生氣論が支配的であったが、17世紀になると近代科学の誕生とともに、「自然」は機械論的<物体>に還元され、それに収まりきれない<心>が「個人の意識」として定義された。ここに近代心理学が、内観を固有の方法として意識を扱う「個人心理学」として始まった理由がある。第2、第3の革命は、20世紀初頭に起きた行動主義革命とゲシュタルト革命である。まず行動主義革命が起きた経緯であるが、内観による古典的実験心理学は<物体>のみを扱う近代科学からみれば「カテゴリー・ミス」を犯していたため、自然科学に比べて実用的な成果をあげられずにいた。そこで行動主義的心理学者たちは、被験者を「観察者」から「刺激に対して反応する一個の被験“体”」へ変化させ、被験者の内面を科学的関心の対象外として排除し

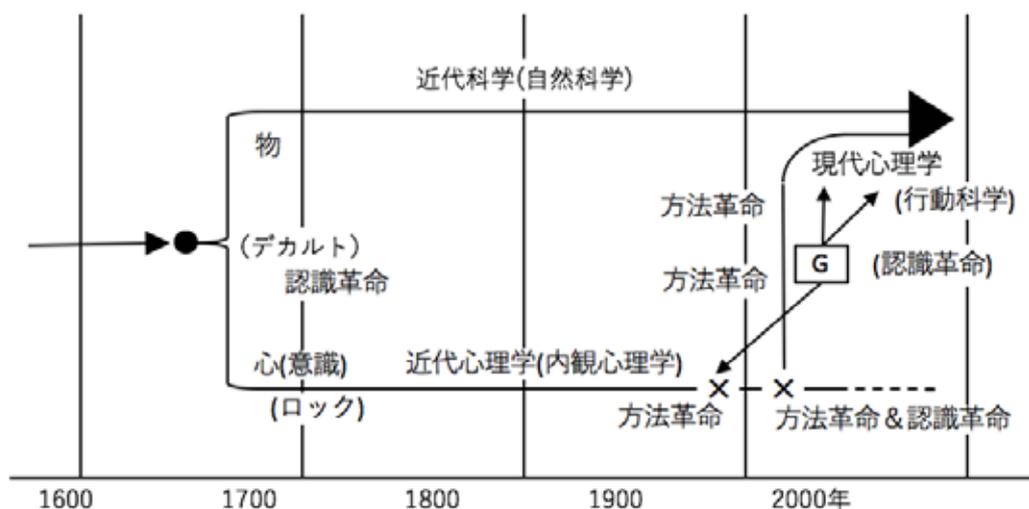


図4 心理学史上の3つの認識論上の革命。

注) 高橋(2016)より引用

た。こうして行動主義革命を経て、近代科学の仲間入りを果たした現代心理学が誕生したのである。それと同時期に起きたのがゲシュタルト革命であり、行動主義革命によって科学的心理学の対象から排除されてしまった意識を実験的操作の対象にすることで、意識の復権が目指された。しかし、ゲシュタルト心理学者たちの試みは「操作的仲介概念の論理的構成」という形で行動主義的心理学に消極的に受け入れられ、それ以降中断したままである。この意識の復権という路線は精神医学や臨床部門の人々の手に引き継がれ、実験心理学的行動主義の人々とは交わらないまま別々に領域を形成している。このようにデカルトの二元論以来「物」と「心」の分裂が続いているのである。「物」と「心」は、心理学の具体的な対象としては「行動」と「意識」である。以上が、高橋(2016)の論点である。心理学が意識を科学の対象として排除し、客観性を重んじる行動主義的心理学に収束しなかった理由として、内なる心を切り捨てることの難しさが挙げられている(高橋, 2016; 渡辺, 2017)。なお、高橋(2016)で扱われているのは実験心理学の歴史なので、主に「説明」による心理学の歴史であり、その中での認識論上の変遷である。一方、精神医学や臨床分野の人々によって引き継がれ、「説明」を方法として用いる実験心理学とは交わらずに別領域を形成している意識の復権の伝統は、「心」の路線上でもあるが、同時に「理解」による心理学であると言える。

以上で、渡辺(2002)の図が理解されたので、ここで用いられている2組の軸に関して2点の問題提起をしたい。第一の点は、「主観的」/「客観的」視点(一人称的/三人称的視点)を、高橋(2016)の「心」/「物」(「意識」/「行動」)の認識論上の対立軸と対応させていることである。この2つの軸を対応させずにそれぞれの軸を組み合わせて考えると、自分の意識を(一人称的に)扱う場合と他者の意識を(三人称的に)扱う場合、自分の行動を(一人称的に)扱う場合と他者の行動を(三人称的に)扱う場合に分けられ、心理学をより精緻にとらえることが可能となる。一人称的に意識を扱う心理学には、内観心理学や自らの意識を記述する現象学的心理学、精神分析<sup>8</sup>などがあげられる。三人称的な意識は、特にディルタイやブレンターノの流れを組んだ記述的心理学によって間主観的にアプローチされ、ナラティブ・アプローチなど今日の質的研究で広く扱われている(山竹, 2010)。また、近年発展が目覚ましい脳科学との隣接分野では、脳の生理学的な状態と意識の関係の研究が盛んに行われており、これも三人称的に意識を扱うものである。このように現代の心理学においては、一人称と意識は簡単に等号で結び付けられるものではない。一方、行動は自分のものであれ他者のものであれ、意識と異なり私秘性はなく、それらを区別する必然性は行動ほど決定的ではない。しかし、他者の行動と意識の関連は観察や言語データから推し量るしかないが、自分自身の行動はそのときの意識との関連を直接的に知ることができるために可能な解釈が異なることを考えると、それぞれを異なる扱いをする場面も考えられる。

以上、渡辺(2002)が主張するように軸を対応させずに細かく分ける場合の例をいくつか挙げた。しかし、筆

者はある心理学研究を軸上のどちらか一方の極に位置づけることを意図しているわけではない。たとえば、作者の意識に迫る質的研究では必ず分析者自身の意識の側面も無視することはできない<sup>9</sup>。あるいは意識にも迫るが同時に行動も分析する研究も多くある。また、意識と行動の区別も難しい。たとえば、脳波などの何らかの生理的指標を行動と呼ぶのか。はたまた、心理学的尺度への回答を意識の報告とみなすのか、反応とみなすのか(岡田, 2006), などの問題があるが、これについては本稿では詳しく論じない。ここでの狙いは、二元論的枠組みにしたがって心理学を分類することではなく、さまざまな軸による、すなわち多角的な心理学への理解を深めることである。高橋(2016)も、二元論的枠組みの解消の先に心理学の未来を描いており、筆者もそれに賛同する。しかし現在のところ、心理学史と現状の心理学を理解するためには、二元論的な枠組みが資する部分は多いにあると考えられる。

第二の点は、「主観的」と「客観的」という語の用いられ方である。渡辺(2002)自身も他の箇所<sup>10</sup>で述べているように、「主観的」と「客観的」は一義的ではない。渡辺(2002)は、この図の軸における「主観性」/「客観性」を「一人称的」/「三人称的」視点と言い換え、さらに第一の問題点として挙げたことだが、「心/物」(「意識/行動」)の認識論上の対立軸、すなわち二元論的な枠組みとほぼ同一だとしている。つまり、渡辺(2002)の中だけでも、「客観的」は以下の4つの意味で使用されていることがわかる。1つ目に、後述する辞書的な意味、2つ目に「説明」という方法をとる際の態度、3つ目に観察者と観察対象が別(三人称的視点)であること<sup>11</sup>、4つ目に心身二元論のうちの物・行動に着目すること、である。あるいは、これらは「客観的」の意味であるというよりも、「客観的」であるための「条件」ととらえる考え方もあるだろう。

以上2点の問題点から、次の論点が導きだされる。心理学において「主観的」/「客観的」という語は、そうであるための条件と一括りにされて多義的に用いられ、概念的な混乱が起きうることである。特に、心理学が「科学」であることを考える際には、いっそう混乱は深くなる。なぜなら、渡辺(2002)が指摘しているように、そもそも「科学的」と「客観的」がほぼ同義であるにもかかわらず、心理学はその歴史を通じて主観性と客観性の対立軸がつかぬかたれているからである。中島(2001)も、自身が編纂した事典のまえがきで、心理学がその歴史を通して、主観主義パラダイムと客観主義パラダイムの狭間の中で揺れ動いてきたことを述べている。しかし、上述のように主客という語は多義的であるため、こうした歴史的な概観において、さまざまな意味が入り組んで論じられていることが推察される。すると、中島(2001)が言う主観主義パラダイムと客観主義パラダイムの間の揺れ動きを直接的に、主題として扱うことは困難なこととなる。実際中島(2001)は、事典全体の内容をして、現代心理学のその両者への折り合いのつけ方を語らしめているのである。

この問題について論じるために、次節以降では、歴史上の主客の意味の入れ替わりと、心理学における科学の基準としての主客の入れ替わりについて確認し、続いて現代における主客の辞書的な意味を確認する。

## 主客の意味とその変遷

東京堂出版の新装版哲学用語辞典によると、主観の意味は以下の歴史的変遷を辿っている。ヨーロッパの言語の *subject* は、日本語の主観と主体の2つを意味する。主体は実践的行為の担い手であり、主観と比して身体性、個別性、社会性、歴史性を持つものである<sup>11</sup>。語源的には、ラテン語の *subjecto*(下に投げる)の名詞形 *subjectum*(下に投げ置かれたもの)からきている。この語はギリシャ語の *hypokeimenon* の訳語であり、アリストテレスにおいて実体という意味を持ち、むしろ今日の客観を意味していた。中世では、人間の表象を *objectum*(前に置かれたもの)として客観と呼び、この客観の性質や状況の担い手を *subjectum*(主観)と呼んだ。その後トマスが *subjectum* に感情の原因という新しい意味を付け加え、近世において今日の意味への方向転換がうかがえる。こうした *subjectum* の実体から主観としての転換の原因は、キリスト教の神がギリシャ哲学の神のように実体としてではなく、主観・主体として把握されるところにも求められる。カントはさらに認識(科学的)成立を可能とする認識作用の遂行者として、主観を超個人的、普遍的なものであり、外なるもの(客観)を構成するものとした。対して感覚主義者マッハは、主観は単なる感覚複合ないし感覚の束にすぎないものとして、主観の先験性がとりはらわれた。一方、客観の意味の変遷は、次の通りである。 *objectum*(前に置かれた

もの)は中世において靈魂にかかわるかぎりにおける事物のさまざまな面であり、受動的能力の始原、作用因であったり、能動的能力の活動の究極、目的因に位し、近世でも今日の主観に近い意味を帯びていた。ドイツ観念論に至って客観は、主観とともに認識論の哲学の主軸となり、近代においては主観性をを超えるものとしての普遍妥当性を意味することが顕著になった。

以上の通り、哲学において、主客の意味の入れ替わりが近世以降<sup>12</sup>に起こったことがわかる。次に、科学的心理学の基準としての主客の入れ替わりについて確認する。

Brunswik(1952)は、本来主観性が担っていた自明な「明証性」が、協働的な「厳密性」を担保する客観性の概念へと移行した経緯を、次のように描いている。デカルトの「我思う故に我あり(コギト・エルゴ・スム)」が示す通り、主観の明晰さと卓越は、真実の規準と考えられ、数学的な理性と相まって合理主義的な傾向を形成していた。よって、ヴントが確立した内観心理学では、物理学が物質に対して為し得た成功を、精神に対して達成し得ると考えられていた。その後ティチェナーの構成主義に代表されるような要素主義的内観から、マッハに代表される感覚主義が導かれ、その後2つの流れへと発展していった。一つはより自然で全体的な形への内観主義への揺り戻しである。しかし内観においては次第に、共通の外的に参照可能な状況が欠如していることが明らかとなっていった。内観的観察の「公的(public)」ではなく「私秘的(private)」な特徴、すなわち「コミュニケーション不可能性」が際立つようになっていった。もう一つの流れとして感覚主義は、19世紀の生理学的心理学の発展に導かれて、徐々に「恒常性仮説(constancy hypothesis)」を基礎とするようになっていった。恒常性仮説とは、感覚的な刺激の要素と、意識的な感覚の、一対一の対応を暗黙に当然とみなすものである。このときに感覚は、外的刺激の存在によって根拠を与えられるため、無心像の思考と比して観察に耐え、主体から主体への報告においてより一致した。測定可能な環境の一時的な継続と社会的な共通性によって、感覚の間主観的かつ内主観的な、一義的な観察が可能となった。バークリーの「存在することは知覚されることである(esse est percipi)」を体現する感覚主義は、このようにして物理的測定の客観的方法を強調するようになり、「経験的実証主義(experiential positivism)」を経て行動主義へと至った。

こうして心理学の科学としての基準が、主観的「明証性」から客観的な「協働的な厳密性」へと橋渡しされていった。以上のように、哲学的な意味および科学的心理学の基準としての主客の入れ替わりについて確認することは、今日の主客と科学性との関係についての考察に、奥行きのある歴史的な視点をもたらす。

続いて、現代における主客の一般的な意味を、スーパー大辞林で確認する。主観は「①対象について認識行為評価などを行う意識のはたらき、またそのはたらきをなす者。通例、個別的な心理学的自我と同一視されるが、カントの認識論では個別の内容を超えた超個人的な形式としての主観(超越論的主観)を考え、これが客観的認識を可能にするとする。②自分ひとりだけの考え。」とあり、客観は「①主観の認識行為の対象となるもの。主観に現れるもの。世界。かっかん。②特定の認識作用や関心を超えた一般的ないし普遍的なもの。主観から独立して存在するもの。客体。かっかん。」とある。主観性と客観性はそれぞれ「主観的であること」、「客観的であること」とあり、主観的は「主観に基づくさま。また、自分だけの見方にとらわれているさま」、客観的は「個々の主観の恣意(しい)を離れて、普遍妥当性をもっているさま。」という意味である。

ここで注目したいのは、主観の②の意味と、そこから導き出されるその他の語の意味である。これらの意味で用いられる場合には、心理学においてどのようなアプローチや立場がとられるかにかかわらず、はたまた心理学に限らず、あらゆる研究は主観的であってはならず、客観的でなければならない、ということになる。ゆえに、この意味での客観性は、科学的な心理学の絶対条件なのである。

ただし、この点については近年、客観性に代わって「間主観性」という概念による理解が提唱されていることにも注目されたい。Constantina & Constantina(2014)によれば、間主観性の概念が、科学における主観性と客観性に関して理解を促す。Constantina & Constantina(2014)は、科学研究のプロセスとアウトプットを分けて考える。科学研究のプロセスは、それを実践する人の背景やバイアスのために文化や個人の要因に影響される。しかし、科学研究のアウトプットでは、科学者のコミュニティによる批判的な検証と間主観的な同意によって、客観性が担保されるのである。つまり、科学の客観性は、社会性(sociality)によって損なわれるのではなく、そのおかげで一定程度保たれるのである。また、Mascolo(2016)は、ヴィトゲンシュタインに

よる内的経験の私秘性の否定と、ミラーニューロンから理解しうる人間の相互的な理解を根拠として、心理学を、外から客観的にでもなく、内から主観的にでもなく、人々の間で間主観的に理解されうるのでと主張している。さきほど「人間科学の方法論」の節で、ヴェーバーの人間科学の方法では、「理解」は科学的妥当性を担保し得ない、という点に触れた。これについて筆者は、科学の実証性にいかなる内実を要求するかどうかは、「私たちの知識・信念体系内部の「位置価」に即して文脈的に規定」されるべきだとする野家(2001)の主張に賛同する。つまり、水準は異なるとしても、説明には説明の、理解には理解の科学的妥当性があるという立場を取りたい。

## 心理学史上の主客の対立

主客の意味を確認したところで、次に心理学史上の主客の対立について論じていくが、その前に、心理学に限らない学問のより広い領域における、思想の二大潮流の対立を確認する。それは、以下のように主客の問題と関連して長く続いてきたのである。

Furedy(1982)は、2500年前のアテネでのソクラテス的な教育観とソフィストの教育観との対立が、今日でも教育哲学の中に暗に息づき、心理学教育に影響していることを言及している。ソクラテス的な教育は、探究(enquiry)とそのための論理(logic)が重んじられる、客観主義的な様式であり、一方ソフィストの教育では説得(persuasion)とそのための修辞法(rhetoric)が重んじられ、”*Homo Mensura*”すなわち「人間は万物の基準である(man is the measure of all things)」の教義に導かれる、主観主義的な様式である(Furedy, 1982)。

哲学における二大潮流の対立に言及したのがJames(1907 柘田訳 1957)である。James(1907/1957)は、「硬い心の人(tough-minded)」と「軟かい心の人(tender-minded)」との間の対立を描いた。硬い心の人には、経験論的で感覚論的、唯物論的、悲観論的、非宗教的、宿命的、多元論的、懐疑的であり、軟かい心の人には、合理論的(「原理」に拠るもの)で主知主義的、観念論的、楽観論的、宗教的、自由意志的、一元論的、独断的である(James, 1907/1957)。Kimble(1984)によると、ソクラテス的なスタイルが硬い心の人となり、軟かい心の人にはソフィストのスタイルを受け継いでいる。

Snow(1964 松井訳 1967)は、文学的知識人を一方の極に、他方の極に科学者(特に物理学者)にして「二つの文化」としてその対立を描いている。Snow(1964/1967)は、さまざまなエピソードを交えて、この2つの文化に属する人々の互いへの反感と、溝の深さについて嘆いている。

もちろん、これらの図式化はあまりに過度に単純化されている。二元論的枠組みを採用することは、ときとして危険なことである。しかし、こうした限界を認めつつも次のことを認識することで、新たな視点が得られる。細部では違いや重なり、変化などがありつつも、大局的には2つの思想の対立が、伝統的に認識されてきた、ということ、ここでは押さえておきたい。これらの対立が現在ではすっかり解消されているかと言えば、特に心理学においては、そうとは言えない状態がある。心理学は、その研究対象(subject matter)の性質ゆえに、主客の対立から免れ得ない運命にある。

では、そのような対立を背景にして、心理学史上の主客の対立は、どのようにして起こり、続いてきたのだろうか。20世紀のはじめ頃から、心理学において諸学派(Schools)が現れ、20世紀はそれらの対立の時代であった(今田, 1962)。構成主義対機能主義、意識本位対行動本位、分析的部分的見方対総合的全体的見方、機械的説明対目的観的立場、受動的立場対動的立場、自然科学的立場対精神科学的立場などの対立があり、学派の対立は特にアメリカにおいて1930年頃に最も激しくなった(今田, 1962)。ドイツのMüller-Freienfels(1935)は、さまざまな学派とそれに関連するトピックを取り上げており、それについて今田(1962)は、客観的心理学と主観的心理学に大別し、それぞれの特質を挙げている(表2)。当時のドイツではアメリカよりも精神科学的心理学に大きな比重を与えており(今田, 1962)、表2においても、特に説明と理解(了解<sup>13</sup>)の違い、そして量的アプローチと質的アプローチの違いが際立っているのが見て取れる。

Bell(2002 渡辺・小松訳 2006)によると、心理学において「量的」アプローチを採ることが、客観的であるための要件として挙げられていることは少なくない。数量化と客観性との関係は、科学革命の時代に始まった。

表2

## Müller-Freinfels(1931)の客観的心理学と主観的心理学の特徴

大別	客観的心理学	主観的心理学
特質	自然科学的態度	精神科学的態度
	原子論的	全体観的
	感覚主義と主知主義	情緒主義と主意主義
	受動主義	能動主義
	生理主義	精神(Psyche)の解剖
	心身平行論	交互作用説
	法則による整理	類型による整理
	一般化	差別化
	機械主義	生氣主義
	因果論的	目的論的
	原因要因としての無意識	目標要因としての無意識
	靈魂(Seele)なき心理学	構造的靈魂(Strukturierte Seele) をもった心理学
	実験	解釈(Hermeneutik)
	分離	統合
	数量化	質的研究
	"説明(Erklärung)"を目的とする	"了解(Verstehen)"を目的とする
	没価値的観察	価値観的観察

注) 今田(1962) p.345より引用

フッサールは、ガリレオの「自然の数学化」によって一義的な客観的世界が作り出され、その後空間や時間だけでなく感性的な性質も数量化され、それによって人格としての主体や精神的なもの、実践が生み出す文化的性質など、多くのものが捨象されてしまったことを指摘している(中村, 1992; 野家, 2015)。そして、フッサールはガリレオのことを「発見する天才であると同時に隠蔽する天才でもある」と表現している(中村, 1992; 野家, 2015)。フッサールは主観的、相対的なものを明証性の源泉としてより価値の高いものとして評価し、生活世界による科学の基礎づけを目指した(中村, 1992)。これは上述の Brunswik(1952)の、科学的心理学の基準の主観的明証性から客観的協働的厳密性への移り変わりを、もう一度引き戻す試みであると言える。

また、主観的アプローチと客観的アプローチの対比は、心理学における第3勢力と呼ばれる「人間性心理学」の台頭によって、「科学(science)」対「人間性中心(humanism)」の対立と分かちがたく論じられた。人間性心理学者たちは、1913年の行動主義宣言から1930年代の新行動主義の台頭、1950年代の認知革命によってますます優勢となっていた客観性を重んじる科学的心理学に対して、主観的な体験や関わりを強調し、実存的で全体的な人間の側面を統合することを志向していた(たとえば Allport, 1955 富沢訳 1959; Rogers, 1955; Maslow, 1957; Rogers, 1961; May, 1961 佐藤編訳 1966)。この起こりつつある対立の問題について、Shaffer(1953)は自分がAPA会長を務めた年に、量的アプローチで接近した論文を発表した。Shaffer(1953)は、心理学において研究する際の相対する2つの態度として取り上げた。ここでの直観的な態度とは、形式的な説明の介在的な手段なしに、直接的(immediate and direct)なプロセスによって知識を得ることを好む態度である。例としては、言葉やジェスチャー、赤面、投影法への反応などが挙げられ、他の人間によって観察者の中にもたらされるものである。一方、客観的な態度とは、間接的(mediated)観察を採用する態度である。生の経験は数量化されることで、代表値や分散によって正確で簡潔に表され、他のデータと比較し、統計的な有意性検定にかけることができる。小田・谷井・北村(2016)は、Shaffer(1953)が用いた質問項目を用いて日本の心

理学者と臨床心理士を対象に調査を行い、現代の日本においてもこのような直観的・客観的態度の違いが見られることを確認している。科学対人間性中心の対立についてレビューを行った Conway(1992)は、科学的なアプローチは要素的・物理的還元主義に立ち、仮説演繹的な量的方法を用い、人間の行動の普遍的法則を追求し、人間中心のアプローチは、複雑で全体的な現象を、因果ではなく意味の理解によって、現象学的、解釈学的、言語的に理解する、としている。そして Conway(1992)によると、こうした対立は次元(dimensions)によって、より良く理解される。Coan(1979)と Kimble(1984)は、この種のアプローチを用いている、と言えよう。Coan(1979)は、心理学者の理論的志向性を測定する尺度を作成し、「非人格的因果律(対人格的意思)」、「行動内容の強調(対経験内容の強調)」、「要素主義(対全体主義)」、「物理主義」、「量的志向(対質的志向)」の5つの因子得点の合計から求められる二次的因子として、「客観性対主観性」を抽出した。小田・谷井・北村(2016)による短縮版の日本語版による調査では、二次的因子は抽出されていないが、これらの5つの因子と類似した因子の抽出が認められた。Kimble(1984)は、心理学において現れているさまざまな対立を12の要素にまとめ、そのうちの「要素主義対全体論」、「決定論対非決定論」、「法則定立対個性記述」、「客観主義対直観主義」、「実験室の方法対フィールドの方法」、「科学的な価値対人間中心的な価値」の6つを1つの因子として抽出し、「科学者(scientist)対人間性主義者(humanist)」と名付けた<sup>14</sup>。

このような主客の対立が際立ってくるのは、やはり臨床の領域であることを付け加えておきたい。臨床家が、クライアントの主観的世界や物語を尊重すべきであることは論を俟たないし、日々の臨床実践の中で、自身の主観を活かしている臨床家は多いと考えられる。筆者も臨床心理士の指定大学院の修士課程で、自分自身の主観的体験や感情に積極的に向き合うように指導を受け、現在もそのような視点を大切にしている。筆者の体験だけでは心許ないので、著名な臨床家の著作からごく少数ではあるが例を挙げてみたい。たとえば、河合(1992)は、中村(1977)を援用しながら、心理療法の科学性について論じている。河合(1992)は、臨床場面において、対象を「切断」し「操作」しようとする科学の知を適用することを強く戒め、中村(1977)の「相互主体的かつ相互作用的にみずからコミットする」、「普遍主義の名のもとに自己の責任を解除しない」態度が、極めて重要だと述べている。また、現代の精神分析的なケースフォーミュレーションのテキストとして近年広く読まれている McWilliams(1999 成田監訳 2006)は、臨床家の主観的な「共感」がクライアントを理解するために必要な道具である、という立場が明確に示されたうえで書かれている。また、精神分析の転移と逆転移という概念をふまえた実践は、臨床心理士試験の出題傾向からもわかるように、今日の日本の臨床心理士に広く求められており、そこでは臨床家の主観がクリティカルな役割を果たすのである。精神分析的アプローチの他にも、人間性中心のアプローチでも、クライアントとセラピスト双方の主観の重要性が強調される。臨床心理士の最も基礎的な姿勢として求められている「セラピーにおけるパーソナリティ変化の必要にして十分な条件(Rogers, 1957)」や、体験過程(experiencing)の概念を用いるフォーカシング(Gendlin, 1964/1999)が、例として挙げられる。

臨床心理学における主客の問題について、保田(2003)はわが国の臨床心理学における教科書知の科学性規準の変遷を明らかにしている。保田(2003)によると、臨床心理学は戦後から1970年頃までは「科学」であることを理想とし、客観的に対象を見る立場を目指す傾向があったが、その後、主客融合型の解決を目指す記述が1970年代から増加し、1990年代以降には現状肯定的に記述されるようになった。現時点における動向の調査はなされていないが、公認心理師法の施行によって社会への説明責任が改めて問われている中で、認知神経科学や統計学の発展も相まって、臨床心理学は全体として客観主義的な方向へと傾いていくのではないかと筆者は予想している。

## 心理学における主客の次元的理解

以上で見てきた通り、心理学に限らないより広い学問領域の歴史を通して、古くから2つ思想の対立があり、心理学もその流れを受け、その対立はさまざまな学派が台頭する1930年代頃から見られた。それ以降、心理学では歴史を通じて、大きく主客と括ることが可能な対立が続いた。その意味では、現代の心理学においては

客観主義的なアプローチが重視されているが、他方で主観主義的アプローチは、特に臨床心理学において大切にされているのである。

さて、主客は多義的な言葉であり、よってここまで見てきた主客の対立には、それぞれの文脈によってさまざまな意味が込められている。本稿でも歴史を概観するという目的のためにはあまりに煩雑になってしまうため、主客の一つ一つの意味を特定した上での議論を行っていない。しかし、主客の多義性の問題は、特に心理学の科学性を論じる場合には次のように先鋭化してくることが考えられる。その文脈における主客の意味が深く意識されないまま、さまざまな意味を一括りにして使用してしまい、そこで起こりうる最も問題と思われることは、主観・主観性・主観的なものを前述の辞書的な意味の「恣意的」として斥け、客観・客観性・客観的なもののみが受け入れられることである。これまでに見てきたように、科学史と心理学史を考慮すると、このように主観・主観性・主観的を簡単に排除できないことは自明なことであるし、特に臨床心理学を射程に入れるとなおさらである。

以上のような、心理学において主客の多義性による意味の交絡があるとするならば、その問題はどのように扱われるべきだろうか。その解決策の一つとして、それぞれの意味の次元による理解(Conway, 1992)が考えられる。因子分析で喩えると、いくつかの下位因子を設定し、各下位因子得点を出すようなイメージである。このようなアプローチは、既に紹介したように Coan(1979)や Kimble(1984)によって用いられている。もちろん、客観(的/性)と主観(的/性)という語を用いない方がいい、と主張したいわけでは決してない。主客という語を用いるときに、一々その意味するところを詳しく述べることは、あまりにも議論を煩雑にしてしまう。本稿で用いられた主客の意味も、大部分ではその文脈に語らせている。しかし、主客に関して、このような次元的な理解がありうると認識しておくだけでも、心理学の主客について議論する際に役立つと考えられる。議論ですれ違いが生じたときに、どのような意味で用いているのか明らかにして共有することが、互いの意見への理解に資するだろう。既に述べたようにどれか一つの意味だけではなく、いくつかの意味が込められて使用されていることもあるので、その場合には絡まった意味を解きほぐしながら議論をする必要がある。

## おわりに

本稿では、心理学の科学性を再検討するために、科学の定義を確認し、科学が歴史的に自然科学と人間科学の大きく2つに分類されてきたことを確認した。その方法として「説明」と「理解」があり、人間科学と自然科学のどちらにおいても、両方が必要である。次に、渡辺(2002)の心理学の分類から、主客の多義性の問題が導きだされた。それぞれの意味の歴史の変遷を確認すると、そこには入れ替わりがあった。恣意的であるか否かという現代における一つの意味での用い方に限定すると、科学的心理学に限らず、あらゆる研究は客観的でなくてはならない、とすることができる。しかし心理学とその周辺の学問の歴史をみると、主客の問題はさまざまなトピックについて、たとえば説明と理解、量と質、科学対人間性中心などの対立と分かちがたく語られてきた。現代では、心理学が「科学的」であることは当たり前とされているが、特に臨床心理学の今後のあり方について考えると、これらの対立は議論されるべき余地がある。さいごに、こうした議論に資するための、主客の多義性に関する次元的な理解を提案した。

たしかに、心理学が科学として人々の福祉に貢献するためには、「恣意的ではない」という意味で「客観的」でなくてはならない。しかし、そうであるからといって、主客という語に込められてこれまで議論されてきたその他の次元を、十把一絡げに一方の極に限定してしまうと、心理学はこれまで培ってきた、また今後得られるかもしれない多くの知見を失うだろう。これまでに繰り返し述べてきたように、二元論的枠組みの採用には、過度の単純化の問題点や、かえって対立を具現化してしまう危険性がある。こうした限界には自覚的であらねばならない。それでも、自然科学的な心理学が志向され、客観・客観性・客観的の極のみが強調されがちな今日において、このような枠組みを採用することによって、軽視されかねない主観・主観性・主観的の極に光を当てることが可能となる。

今日の日本の心理学者にとって、心理学の科学性は実際にどのように認識されているのか、主客の問題と合

わせて検討することが、今後の課題として残されている。

注

- 1 研究社の英語語源辞典によると、scienceの語源は1.知識(1340年頃)、2.学問、科学(1350年より前か)、である。
- 2 ここから、野家(2015)で論じられていた「科学」の日本語の本来の意味が、この当時根強く残っていたことがわかる。
- 3 法則定立と個性記述の概念を心理学にもたらしたのは、G.W.オルポートである(サトウ・高砂, 2003)。
- 4 科学は、自然科学・社会科学・人文科学の3つにも分けられる(新版哲学・論理用語辞典)。しかし、本稿では「説明」と「理解」に焦点を当てて論じるため扱わない。
- 5 ヴェーバーは、自然科学と人間科学とをリッカートが「価値」によって区分けしたように、事象の「意味」によって区分けしている(向井, 1997)。
- 6 筆者は初稿執筆時にはこのように考えていたが、校正時までにヴェーバーが「理解」に伴われる「明証性」と、「説明」に伴われる「妥当性」とを、厳然と区別していること(Weber, 1913 海老原・中野訳 1990)を知った。「明証性」と「妥当性」の異同に関しては、今後の課題としたい。
- 7 ザンクトは、実験的方法が適用可能な対象は感覚や連想などの人間の基本的な諸過程であり、社会現象やパーソナリティなどの高次の心的過程は観察によってのみ研究される、と確信し、民俗心理学に強い興味を持った(Wertheimer, 1970 船津訳 1971)。
- 8 河合(1992)によると、深層心理学の本質は「私の心理学」である。河合(1992)は、深い心の層では相当な普遍性を持つ現象があることを前提として、一人一人が各人の深層心理学を築くべきだ、とも述べている。
- 9 質的研究では、インタビューデータやフィールドノーツなどの他者のデータを分析する際には、分析者自身の内省、すなわち「反省性(リフレクシヴィティ)(能智, 2011)」が重要である。
- 10 既出の「渡辺(2002)によると、一般に「説明」という方法を採用際の態度は客観的である、と理解されることが多いが、この場合はそうと限らず…」という箇所である。
- 11 三木(1967)は、主観とは「作用するもの」すなわち意識であるとし、客観とは「対象」すなわち身体を含む環境であるとしている。身体に依って自己の身体の外にある環境に働きかける、すなわち行為をするときには「主体」であり、「主体」は主観的かつ客観的な性質を持つ。この意味では、一人の人が自分の意識でもって自分の身体を観察する場合、つまり一般的な意味での「一人称的」な場合にも、渡辺(2002)が言うところの「三人称的」な視点を持ち得るのである。
- 12 小林(2010)によると、この歴史的な転倒はデカルトによって切り拓かれ、カントによって決定的となった。ギリシャ語からラテン語、英語、さらに日本語への翻訳に伴う複雑な意味の変遷については、小林(2010)に詳しい。
- 13 理解と了解は、同じドイツ語の *verstehen* の訳語である。
- 14 横山(2018)によって概観されている、1980年代を1つの基点として進行した「物語への転回」も、実証主義的自然科学と異なる心理学のあり方を模索する動向であると言える。その勢いは現在欧米だけでなく、我が国においてもますます盛んになりつつある。この点については本稿で十分に言及できなかったため、今後の課題としたい。

#### 引用文献

- Allport, G. W. (1955). *Becoming: Basic considerations for a psychology of personality*. New Haven: Yale University Press. (豊沢 登 (訳) (1959). 人間の形成——人格心理学のための基礎的考察)
- Baker, D. B., & Benjamin, Jr. L.T. (2000). The Affirmation of the Scientist-Practitioner: A look back at Boulder. *American Psychologist*, 55(2), 241-247.
- Belar, C. D., & Perry, N. W. (1992). National conference on scientist-practitioner education and training for the professional practice of psychology. *American Psychologist*, 47, 71-75.
- Bell, A. (2002). *Debates in psychology*. Hove: Routledge. (渡辺 恒夫・小松 栄一 (訳) (2006). 論争の中の心理学——どこまで科学たりうるか 新曜社)
- Brunswick, E. (1950). *The conceptual framework of psychology*. Chicago: University of Chicago Press.
- Coan, R. W. (1979). *Psychologists: Personal and theoretical pathways*. New York: Irvington publishers.
- Constantina, S. & Constantina, S. (2014). Subjectivity and objectivity in science: An educational approach. *Advances in historical studies*, 3, 183-193.
- Conway, J. B. (1992). A world of differences among psychologists. *Canadian Psychology/Psychologie canadienne*, 33(1), 1-24.
- Frank, G. (1984). The Boulder Model: History, rationale, and critique. *Professional Psychology: Research and Practice*,

- 153), 417-435.
- Furedy, J. J., & Furedy, C. (1982). Socratic versus Sophistic strains in the teaching of undergraduate psychology: Implicit conflicts made explicit. *Teaching of Psychology*, 9(1), 14-20.
- 今田 恵(1962). 心理学史 岩波書店
- James, W. (1907). *Pragmatism*. Works of William James. (栞田 啓三郎 (訳) (1957). プラグマティズム 岩波文庫)
- 河合 隼雄 (1992). 心理療法序説 岩波書店
- 河合 隼雄 (1995). 第 3 章 基礎理論 — 原論——科学性的の問題 河合隼雄 (監修) 臨床心理学(第一巻)——原理・理論 (pp.77-90) 創元社
- 河合 隼雄・福島 章・村瀬 孝雄 (編) (1991). 臨床心理学大系 第 1 巻 臨床心理学の科学的基礎 金子書房
- Kimble, G. A. (1984). Psychology's two cultures. *American psychologist*, 39(8), 833-839.
- 小林 敏明 (2010). <主体>のゆくえ——日本近代思想史への一視角 講談社
- 丸山 高司 (1985). 人間科学の方法論争 勁草書房
- Marzillier, J., & Hall, J. (1999). *What is clinical psychology? Third edition*. Oxford: Oxford University Press. (下山 晴彦 (編訳) (2003). 専門職としての臨床心理士 東京大学出版)
- Mascolo, M. F. (2016). Beyond objectivity and subjectivity: The intersubjective foundation of psychological science. *Integrative psychological and behavioral science*, 50(4), 543-554.
- Maslow, A. H. (1957). A Philosophy of Psychology. In J. E. Fairchild (Ed.), *Personal Problems & Psychological Frontiers* (pp. 224-244). New York: Sheridan House.
- 松見 淳子 (2005). 科学者□実戦家モデルと心理学——連携が生み出す臨床心理学の視座. 下山 晴彦 (編) 心理学の新しいかたち 第 1 巻 心理学論の新しいかたち(pp.47-65) 誠信書房
- May, R. (1961). *Existential psychology*. New York: Random House. (佐藤 幸治 (編訳) (1966). 実存心理入門 誠信書房)
- McWilliams, N. (1999). *Psychoanalytic case formulation*. New York: Guilford press. (成田 善弘 (監訳) (2006) ケースの見方・考え方——精神分析的ケースフォーミュレーション 創元社)
- 向井 守 (1997). マックス・ヴェーバーの科学論——ディルタイからヴェーバーへの精神的考察 ミネルヴァ書房
- Müller-Freienfels, R. (1935). *The evolution of modern psychology*. (W. B. Wolfe, Trans.) New Haven: Yale university press. (Original work published 1931)
- 長山 恵一 (2015). ヴェーバーの支配の正当性論の再考(3)——社会科学的認識論から見た問題点の整理. 現代福祉研究, 15, 87-140.
- 中島 義明 (2001). まえがき. 中島 義明(編) 現代心理学[理論]辞典 朝倉書店
- 中村 桂子 (1990). 生命誌の扉をひらく——科学に拠って科学を超える 哲学書房
- 中村 雄二郎 (1977). 哲学の現在——生きることを考えること 岩波書店
- 中村 雄二郎 (1992). 臨床の知とは何か 岩波書店
- 中山 茂 (1974). 歴史としての学問 中央公論社
- 日本心理臨床学会 (1993). 臨床心理士養成のための大学学部・大学院カリキュラム. 心理 臨床学研究, 11(特別号), 5-63.
- 能智 正博 (2011). 臨床心理学をまなぶ 6 質的研究法 東京大学出版会
- 野家 啓一 (1993). 科学の解釈学 新曜社
- 野家 啓一 (2001). 実証主義の興亡——科学哲学の視点から 理論と方法, 16(1), 3-18.
- 野家 啓一 (2015). 科学哲学への招待 筑摩書房
- 小田友理恵・谷井淳一・北村英哉 (2017). 心理学観を測定する尺度作成の試み 日本パーソナリティ心理学会第 26 回大会 発表論文集.
- 岡田 努 (2006). 3 章 心理学の技法 海保 博之・楠見 孝 (監修) 心理学総合事典(新装版)(pp.36-42) 朝倉書店
- 大塚 義隆 (2004). 第 1 章 臨床心理学の成立と展開 1——臨床心理学の定義 大塚 義隆 (編) 臨床心理学原論(pp.1-106) 誠信書房
- Rickert, H. (1986). *The limits of concept formation in natural science : a logical introduction to the historical sciences (abridged edition)*. (G. Oakes, Ed. and Trans.). Cambridge; New York: Cambridge University Press. (Original work published 1896)
- Rogers, C. R. (1955). Persons or science? A philosophical question. *American Psychologist*, 10(7), 267-278.
- Rogers, C. R. (1957). The necessary and sufficient conditions of therapeutic personality change. *Journal of consulting psychology*, 21(2), 95.
- Rogers, C. R. (1961). Two divergent trend. In R. May (Ed.), *Existential psychology* (pp. 85-93). New York: Random

House.

- 佐々木 力 (1996). 科学論入門 岩波書店
- サトウ タツヤ (2014). 01 原理・歴史 [総説] 下山 晴彦 (編) 誠信 心理学辞典 [新版](pp.3-4) 誠信書房
- サトウ タツヤ・高砂 美樹 (2003). 流れを読む心理学史——世界と日本の心理学—— 有斐閣
- サトウ タツヤ・渡邊 芳之・尾見 康博 (2000). 心理学論の誕生——「心理学のフィールドワーク」 北大路書房
- Shaffer, L. F. (1953). Of whose reality I cannot doubt. *American Psychologist*, 8(11), 608-623.
- 下山 晴彦 (2001). 1部 臨床心理学の専門性 第1章 臨床心理学とは何か 下山 晴彦・丹野 義彦 (編) 講座臨床心理学 1——臨床心理学とは何か(pp.3-26) 東京大学出版会
- 下山 晴彦 (2014). 臨床 [総説] 下山 晴彦(編) 誠信 心理学辞典 [新版] (pp.351-352) 誠信書房
- Snow, C. P. (1964). *The two cultures*. Cambridge: Cambridge University Press. (松井 卷ノ助 (訳) (1967). 二つの文化と科学革命 みすず書房)
- 高橋 滯子 (2016). 心の科学史——西洋心理学の背景と実験心理学の誕生 講談社
- 田邊 元 (1918). 科学概論 岩波書店
- 丹野 義彦 (2001). 2部 日本の臨床心理学の発展に向けて 第3章 実証にもとづく臨床心理学 下山 晴彦・丹野 義彦 (編) 講座臨床心理学 1——臨床心理学とは何か(pp.135-154) 東京大学出版会
- 渡辺 恒夫 (2002). 0-1 心理学の哲学とは何か渡辺 恒夫・村田 淳一・高橋 滯子 (編). 心理学の哲学(pp.3-20) 北大路書房
- 渡辺 恒夫・村田 淳一・高橋 滯子 (編) (2002). 心理学の哲学 北大路書房
- Weber, M. (1913). Über einige kategorien der verstehenden soziologie. In R. Kroner & M. Georg (Eds.), *Logos: Internatlnale zeitschrift für philosophie der kultur*, 4. Band, 3. Heft (pp. 253-294). Tübingen: J.C.B. Mohr. (海老原 明夫・中野 敏男 (訳) (1990). 理解社会学のカテゴリー 未来社)
- Wertheimer, M. (1970). *A brief history of psychology*. New York: Holt Rinehart and Winston. (船津 孝行 (訳) (1971) 心理学史入門 誠信書房)
- Wright, G. H. von. (1971). *Explanation and understanding*. Ithaca: Cornell University Press. (丸山 高司・木岡 伸夫 (訳) (1984) 説明と理解 産業図書)
- Wundt, W. M. (1901). *Einleitung in die philosophie*. Leipzig: Engelmann.
- 保田 直美 (2003). 臨床心理学における科学性規準の変遷 教育社会学研究, 第72集, 131-148.
- 山竹 伸二 (2010). 現象学的心理学の可能性 アジア太平洋レビュー, (7), 28-40.
- 横山 草介 (2018). 「意味の行為」とは何であったか?——J.S.ブルーナーと精神の混乱の修復のダイナミズム 質的心理学研究, 第17号, 205-225.